

## Program

### Veni Sancte Spiritus (K.47) Sancta Maria Mater Dei (K.273) Venite Populi (K.49)

### 「ハ短調ミサ」(K.427/417a)

指揮 佐藤宏充

ピアノ 大熊敏子 櫻井由理

秋田薫 大森寿枝 滋田聖美 高橋知子 辻山洋美 村谷祥子  
甲斐川ゆき子 水流陽子 古市尚子 山口克枝  
井東讓 辻端幹彦 生駒文昭 渡部智也  
アンサンブル・アマデウス

#### Veni Sancte Spiritus K.47 〈聖霊よ、来たれ〉

正確な作曲時期は明らかではないが、1768年の初夏又は秋だろうと思われる。  
ごく最近の説によれば、この曲は宮廷から大切な作曲依頼を受けたために、その腕慣らしとして  
ウィーンで作曲したのではないかといわれる。  
その依頼というのはレンヴェーク街にある孤児院の、新しい付属聖堂の献呈式で演奏される荘厳  
ミサ曲であった。このVeni Sancte Spiritusも実は、その献呈式のために作曲された可能性が高  
い。

#### Sancta Maria Mater Dei K.273

聖母マリアよ、みもとにひれふす私の生ある限りは後楯となり  
死に臨んでは護り庇ってください。  
1777年9月9日 ザルツブルクにて。「アヴェ・ヴェルム・コルプスに匹敵する」と言われるほど、  
魅力ある作品である。  
マンハイム・パリへの大旅行を前にした個人的な祈願のために作曲された。モーツァルトは病氣  
の父を残し、母アンナ・マリアと共にザルツブルクを出発する。  
簡潔にして深遠な響きは、21歳の若者の「未来への希望」と「家族への想い」に満ちている。し  
かし、彼は知っていたのだろうか？  
この旅が青春の幸福が過ぎ去り、人生の幻滅のはじまりである事を…。  
よく知られているように母はパリで客死する事になり、ザルツブルクには帰らない。父レオポ  
ルトにとって、妻と最後の別れとなるのである。

#### Venite Populi K.260(248a) 〈来たれ、もろもろの民よ〉

作詞者は不詳。「尊き秘蹟のための奉獻歌」と記されていることから、6月のキリスト昇天祭の  
奉獻のために書かれたと思われる。四声の二つの合唱のために書かれている。ふたつある四  
部合唱が、ほとんど「全く同じ」に作られていることがない。ヴェネツィア楽派の影響を受けた  
とも、先輩作曲家たち（ベルナルディやハイドン）の作品を研究した結果とも言われているが、  
なぜ、モーツァルトがこのような編成の曲を作ったのか、動機はわからない。  
モーツァルトは晩年、コンスタンツェがバーデンで世話になった合唱指揮者シュトルに「アヴェ  
・ヴェルム・コルプス」を贈ったことは有名であるが、そのほかにもいくつかの曲も贈られてい  
て、それらの中にこの奉獻歌も含まれている。  
そして、そのまま、多くのことがヴェールに包まれたまま、この曲は長く忘れ去られることとな  
る。やがて、時代という洗礼を受けた後、この短いながらも若いモーツァルトの意欲が凝縮され  
た作品が、ある大作曲家を魅了する。

#### ハ短調ミサ K.427 (K.417a)

映画『アマデウス』において、モーツァルトとコンスタンツェの結婚式のシーンでキリエが流れる  
……。

1782年8月4日、ウィーン・聖シュテファン大聖堂において、モーツァルトとコンスタンツェの結婚  
約が同意され、締結された。しかし、この結婚契約書中の〈下記の依頼人〉には、ザルツブルクに  
住む父レオポルトの名はなかった。頑なに結婚を許可しなかった父や姉に対して何とか認めさせよ  
うと、故郷での“お披露目”のための壮大なミサに着手した(……と言われている)。  
モーツァルトが、このような大規模な教会音楽作品を、まったく個人的な理由で、自発的に作った  
ことは、驚くべきことである。なぜなら、大司教コロレドと争った末、教会音楽家としての活動  
をつづける義務も必要もなくなったのだから。ウィーンに移ってから、音楽愛好貴族ズヴィーデン  
男爵を通して知ったバロック時代の音楽(バッハやヘンデル)の影響を多く受け、しかもモーツァ  
ルト独自の様式にまで消化し、幅広い豊かな構成と、大規模な編成も大きな特徴となっている。純粋  
にモーツァルトの心から発した誓いにながされたこの曲は、以前の教会作品とは次元の異なった  
ものであるともいえよう。  
また、このミサ曲の作曲と並行して「コンスタンツェのためのソルフェッジョK.393」(全6曲)とい  
う練習曲を作っている。あきらかに妻を〈ソプラノ歌手〉として父や姉に紹介するための、こま  
やかな心配りである。  
さて、里帰りは、結婚して翌年(1783年)。だがこの時点ではまだできておらず、完成していたのは  
「キリエ」「グローリア」「サントゥス」「ベネディクトゥス」の部分のみ。姉ナンネルの日記に  
は、

【23日。8時にミサ。聖歌隊員養成所で、弟のミサ曲の練習。このミサ曲で義妹がソロを歌う】

【26日。聖ペテロ教会でミサ聖祭。弟が自分のミサをあげた。宮廷楽団員がみんな参加した】

この時の義理の妹の印象についてはなにも書かれていない。  
なぜか、初演をはたした翌27日、若夫婦はザルツブルクを出発してしまう。モーツァルトはウィ  
ーンに戻ってから、再びこのミサに着手したものの、結局完成させることはなかった。

#### モ連メンバーよりひとこと

#### アルト・山口克枝

モーツァルトの楽曲には一度聴いて口ずさむことのできるポピュラリティ、作曲はモーツァルトね！と言わせ  
るオリジナリティ、そして心憎い仕掛けがたくさんあります。演奏して喜び、聴いて喜ぶ、それが私にとつ  
てのモーツァルトです。  
子どもの頃から母はよくモーツァルトを歌っていました。母の「すみれ」コンスタンツェ、夜の女王のアリア、  
その声は生き活きとしていました。私が初めて歌ったアリアもモーツァルト「Vedrai carina」でした。こんな、  
モーツァルトは自然と好き！な私が、長年にわたるチーム戦、ミサ全曲演奏に携わることが出来、この上なく  
幸せでした。第9回の「バスティアンとバスティエンヌ」ではなんと演出までさせて頂きました。これまで一  
緒に演奏してきた『モ連』の仲間、そして暖かく見守ってくださったお客様に心よりお礼申し上げます。